

日本労働年鑑 第56集 1986年版
The Labour Year Book of Japan 1986

第一部 労働者状態

III 労働者の生活

5 妻からみた夫の働きぶり

八四年、八五年の労働時間短縮問題の議論のなかで、日本の労働者の「働きすぎ」が問題とされた。ここでは組合員の妻を対象にして実施された調査から、夫の働きぶりや労働時間にたいする妻の意識をみることにする。

調査

『労働時間短縮に関する組合員の妻の意識調査結果報告書』（全日本労働総同盟調査局、八四年一一月は、同盟傘下の組合員の妻約二〇〇〇人を対象に、八四年九月中旬から一〇月中旬にかけてアンケートを配布し、一〇六五通を回収（回収率五三・三％）した。

夫の帰宅

家族そろって一緒に夕食をとれないことが一ヵ月平均でみて多いとしたものは半数弱（四五・四％）を占め、その理由は、「夫の帰宅が遅い」ことにある（九〇・五％）。夕食を一緒にとれないことが多いものは、夫が働きざかりの三〇歳代に目立つ。「夫の帰宅が遅い」原因は、飲み会など「主に仕事上のつきあい」（一八・四％）よりも、「主に仕事、残業」（七三・八％）にある。「仕事上のつきあい」は、夫の年齢が高いほど増加し、他方、「仕事、残業」は、年齢が低いほど漸増し、三〇歳代にピークがある。

「働きすぎ」の夫

仕事や残業で帰宅が遅く、有給休暇もあまりとらず（「病気や用事以外ではめったにとらない」四七・二％、「ほとんどとらない」二四・七％）、さらには休日出勤までする夫を、妻は働きすぎだとみている（五五・〇％）。妻は、働きすぎの夫に、「肉体的疲労」（五九・五％）、「精神的ストレス」（四七・九％）、「生活の不規則」（三四・四％）といった問題が生じないかと心配している。働きすぎと感じている妻は、夕食までに帰宅することが少なかった三〇歳代の夫をもつものに多い。

妻の要望

こうしたことから、妻は、「有給休暇ぐらいは全部とれるように」（三八・一％）、「盆、暮の休みはそれぞれ、せめて一週間ぐらいは休みがほしい」（三五・三％）と要望している。ちなみに夏休みの取得日数は、一週間程度以上が二九・七％を占めるが、とくになしが一三・七％で、一日から五日程度が四六・九％にも達する。休日増加の要望とともに、労働時間短縮（残業を除く）の要望も強いが、残業と早出を減らすよう求める声は、それらに比べ弱い（一六・六％）。これには、「夫の体は、心配ですが、残業や休日出勤がなければ家計はどうなるわかりますか」といった自由記入意見にみられるように、残業収入への依存度の高い家計の現実があるといえる。

休日の過ごし方

ここの二、三年の家族旅行の有無では、「ある」が五三・五%で、このほか「盆、暮の帰省ならある」二四・〇%、「ない」二二・五%となる。家族旅行は比較的活発だが、盆、暮の帰省が多いことともに、その日数(盆、暮の帰省以外をふくむ)は、「一、二日」二九・八%、「三日程度」二六・七%と少なくなる。しかし、夫の休日の過ごし方では、いわゆる「休日粗大ごみ」という特徴は強くない。休日の過ごし方は意外と多様である。とくに二〇歳代と三〇歳代の夫では、四〇歳代以上に比べ休日の過ごし方が多様化している。

日本労働年鑑 第56集 1986年版

発行 1985年12月5日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年8月15日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1986年版(第56集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
